

との
みもの
がたり

鳥海物語嘩（全6回）

―胆沢城造営以前―

平谷 美樹

わたしは胆沢川と北上川の合流近くにある段丘である。

わたしと人の関わりの始めは、七世紀中頃から八世紀にかけてであった。

その頃、わたしの上に集落が営まれた。家の形は竪穴式住居。地面を少し掘り下げて屋根を掛けたものである。

そして、わたしの北東部に権力者の大きな墓が築かれた。現在それは縦街道古墳群と呼ばれている。ここに住み墓を造営したのは蝦夷と呼ばれた人々。朝廷の力はここまでは及んでいなかったのだ。

中央の力の象徴である胆沢城が胆沢川の南に築かれるのはおよそ百年の後である。

蝦夷の世界とはいえ、中央との繋がりが無いわけではなかった。古墳には勾玉や鉄刀などと共に、銅で出来た銭や飾り金具をつけた帯などが埋められていた。銅の銭は和同開珎。名前は聞いたことがある。日本で始めて

鑄造された銭だ。飾り金具の帯は、当時、都の下級役人がつけていたものである。それらは、中央の者が蝦夷に授けたものだ。

中央の者たちはそうやって贈り物をしつつ、蝦夷との距離を縮めていくという方法で、蝦夷の世界に自分たちの味方を作って行ったのだ。

その頃はすでに宮城に多賀城があったから、宮城や山形など、わたしよりずっと南の蝦夷たちは、朝廷の兵との戦いを繰り広げていた。その戦が間もなくこの地も巻き込んでいく。攻め寄せる朝廷の軍と阿弭流為との戦いが始まるのである。

わたしは川に面した段丘であるから、攻め込もうとする敵を防ぐことに適した地形であった。後に要塞に使われたこともある。もしかすると、侵略する中央に対する防衛のための蝦夷兵たちが住んでいたのだったかもしれないが――。そのあたりの記憶ははつきりしない。